森のようちえん

森のようちえん全国ネットワーク連盟
内田幸一

幼児期を

どのようにとらえたらいいでしょう

幼児期の子どもたちは、教科学習による系統的な教育を受ける前の段階にいます。感覚的・経験的な体験を通じて学ぶことに適した時期です。

形や色、質感、臭いなどを五感をたよりに受けとめます。想像をめぐらし、自分なりな空想をいだいたり、知識によらない解釈を試みます。

幼児は自身の中から生まれる興味関心が、次の行動のきっかけになります。興味をもった事に関わりそれを繰り返し、集中し、積極的に動きます。

行動の総てが自分を成長させる糧であり、行動の中の様々な体験を通じて考え行動することをくりかえし、知的な発達も促されます。

空想的で現実の世界に生きながら想像や様々な思いをめぐらせます。

周囲の状況から様々なことを感じ取りますが、それをうまく表現することは苦手です。

幼児期の

自然と子どもの関係

「森は幼児に取ってどんなところなのか」

考えましょう

森は発見の場

・　草花や昆虫、木の葉や木の実、鳥や小動物、雨や風、雪や氷、暑さ寒さ等など自然の中で子ども達が気づき、見つけられることがたくさんあります。

森は不思議に満ちあふれている場

・幼い子どもたちにとって自然の中は不思議に満ちあふれています。散歩に出かけたり、野原や森の中で過ごせば、珍しいもの、見たことの無いものなど発見の連続です。自然に興味、関心を持つ機会を得られます。

森は自分で考え行動する場

- 森の中や野原などあまり人工的で無い空間の中でゆったりした時間を過ごし、遊びを見つけ出し、それを行うのは子ども自身です。自らが主人公になって遊ぶ機会がたくさんあります。

秩序を学び、自然をそのまま受入れる場

- 自然の秩序や摂理が子どもたちに様々な影響を与えます。 自然現象を人間がコントロールすることは出来ません。寒さ暑さ天候の良し悪しは野外で活動する際に直接的に影響しますが、子ども達は自然にそれらを受け入れます。

自然に合わせ自分を変化させる場

・暑さ寒さには衣服を調整します。天候の悪い時は雨に対応する身支度をして外に出ます。子どもたちは自分の状態を変化させることで対応出来ることを理解します。

冒険心を発揮する場

・ 多様な環境で子どもたちは冒険心を様々に発揮し、木登りや倒木渡り、急斜面を登ったり飛び降りたり、いろいろなことを試みます。自分の力量を計りながら様々なチャレンジをします。

危険や怖さを知る場

・怖さを感じて躊躇してチャレンジすることをやめたり、試みたりは子ども自身の裁量にまかされます。大人にやれされるのではなく、やがては自分のチャレンジを達成します。

森は時間がゆっくり感じられる場

- 遊びをおりまぜながらのゆったりした散策では、時間がゆっくり流れているといった感覚をおぼえます。道々で出合う様々な自然の様子に落ち着いた気持ちで向き合うことで、五感は鋭敏さを増し磨かれます。

心の柔軟さと適応力を得る場

・衣服や体が汚れたりすることも当たり前、体をきれいにしたり衣服を着替えることも不自由なくこなします。そして自分に関わる様々な状況を柔軟に受け入れる様になります。

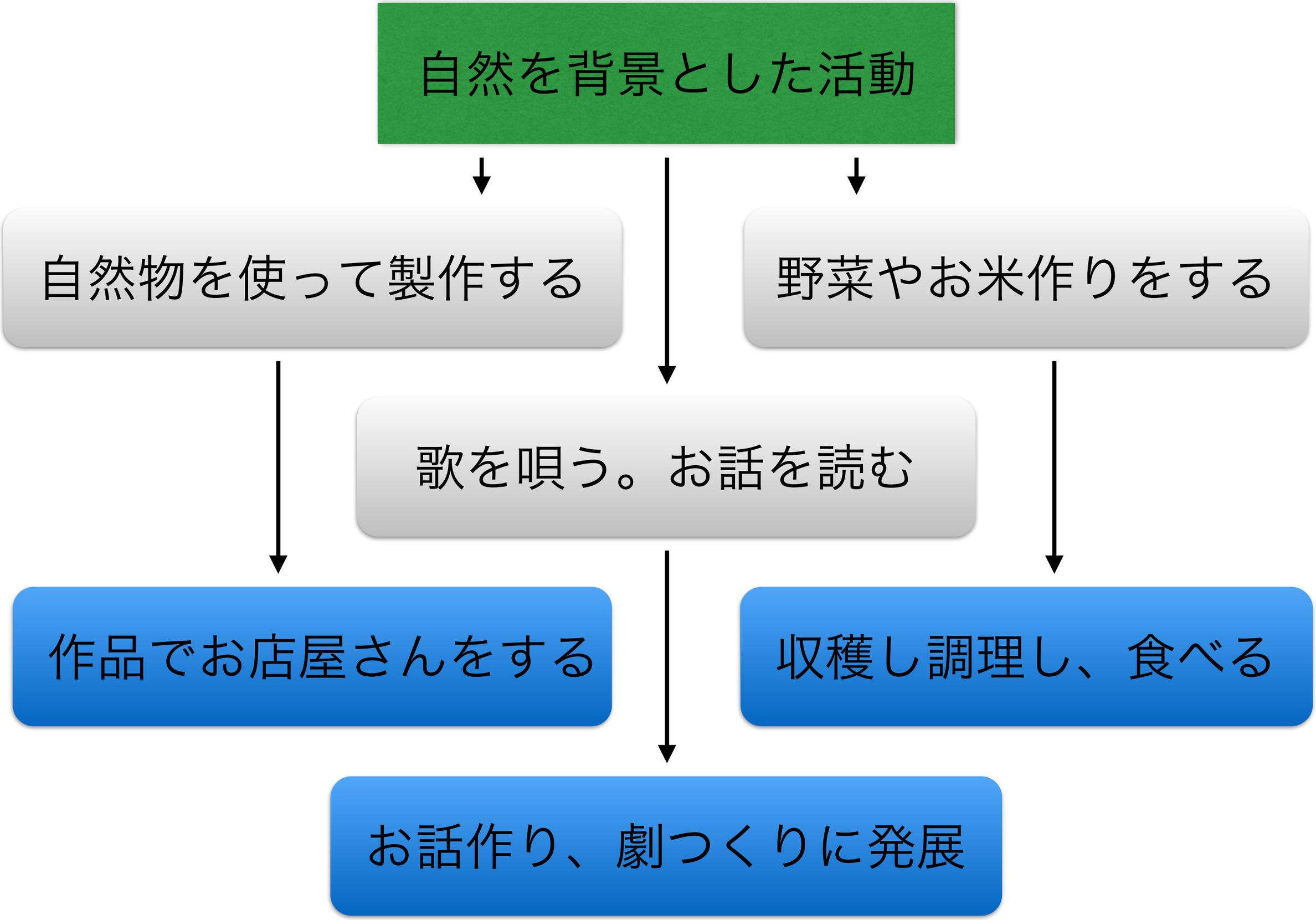
森は創造性や空想を生む場

・幼児にとって森の中は空想めぐらす世界でもあります。妖精や天狗、お化けや怪物などがいる場所にもなり、森ではそれぞれに様々な営みがあり、動物の家族や昆虫がまるで人間の世界のように暮らしている様に思えたり、妖精や怪物が事件を巻き起こしていると思えたりする世界となります。

森のようちえんの
野外保育では
どのように
保育活動が構成されて
いるのでしょう

自然の中で過ごす中で感じ
子ども達がとらえてきた様々な事柄から

活動に反映し具体的に盛り込んだ活動を行う


自然を背景とした活動
自然物を使って製作する
野菜やお米作りをする
歌を唄う。お話を読む
作品でお店屋さんをする
収穫し調理し、食べる
お話作り、劇つくりに発展

子ども達は自分が経験したこと体験したことが
形を変えて活動になることで理解や参加意欲が増します

意欲的で活動の内容を良く理解し、自主的で主体的な様子で活動に参加します。自ら考え状況を判断して適切な動きをします。

森のようちえんの保育活動

体 験

体験を活かした活動

認識や理解が進む

意識化
概念化

従来の保育活動

保育者が提供する活動

体験や経験値が上がる

認識や理解が進む

これまでの一般的な幼児教育では
活動を用意し、その中で体験を
増やすことで意識化が進められた

森のようちえんでは
自然の中での遊びの体験を背景にした
活動を作り出し、意識化がすすめられる

森のようちえんにおける

こうした組み立てを行うことで

活動の内容理解や参加意欲が増し

自ら意欲的に活動に参加し

主体的な動きの中で意識化が進む

体験を背景にした活動へは

遊びの体験が豊かなほど

活動の参加意欲が増し、内容を良く理解し

自ら行動を生み出し

意欲的に活動に参加します

子ども達はどんな育ちの様子へ
向かうのかご紹介しましょう

森のようちえんの教育効果

・興味関心により自ら行動し、自立が促されます。

・発見の機会が多く、自然理解が深まります。

- 機敏で身のこなしの良い体と体力を得られる

- 人間関係を充実させる様々な遊びや子ども同士の関係が豊富に生まれる

- 大きな子を小さな子がまね、年長者を手本とした成長が見られます。

- 年齢が進むことと成長と繋がっていることに気づく機会が多く、年長者である自覚が促されます。

- 森や自然から空想に満ちた創造性を発揮します。

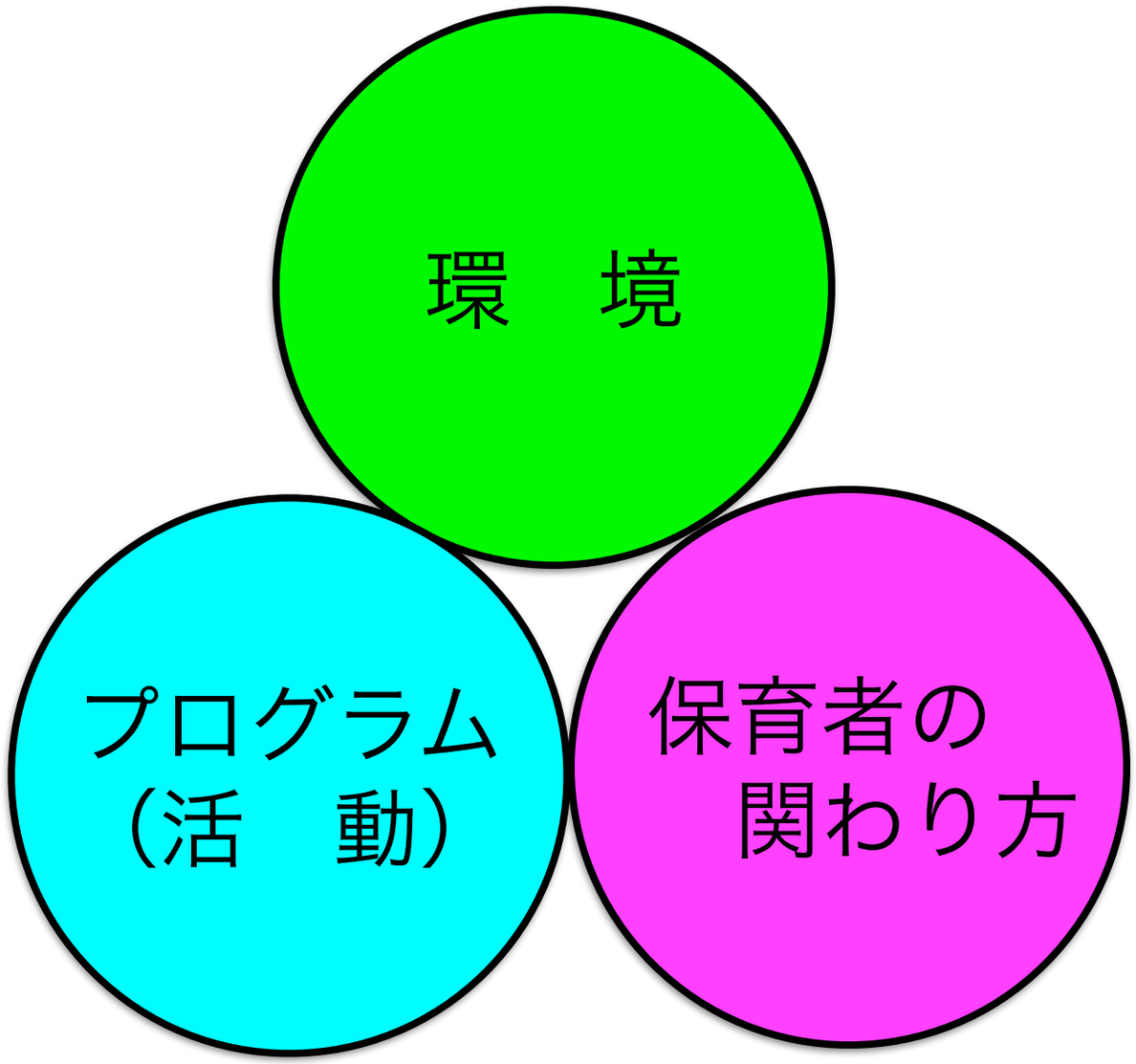
- 素朴な技術や伝統として受け継がれる文化や風習を経験的にとらえます。

・ 自然から感じたことを言葉にすることで豊かな言語表現を得ます。

・ 状況をとらえて、考え自ら行動する様になります。

保育資源と
保育者の関わりについて

森のようちえんの三要素



森のようちえんはこの３要素で構成されています。
これは保育自体の３要素とも言えます。

自然環境には地域性や違いがある

- 日本列島が南北に長い島であるため緯度が異なれな自然環境も変わります。標高の高低でも自然環境の様子は変わり、平野と山間地でもその自然の様子は異なります。地域性や違いを活かした活動を行うことが大切です。

地域にある様々な環境を見つける

- 植林された針葉樹林と広葉樹の林では森の様子がまるで違う。湿原、河原、池沼など水に近い環境もその様子は変化に富んでいます。

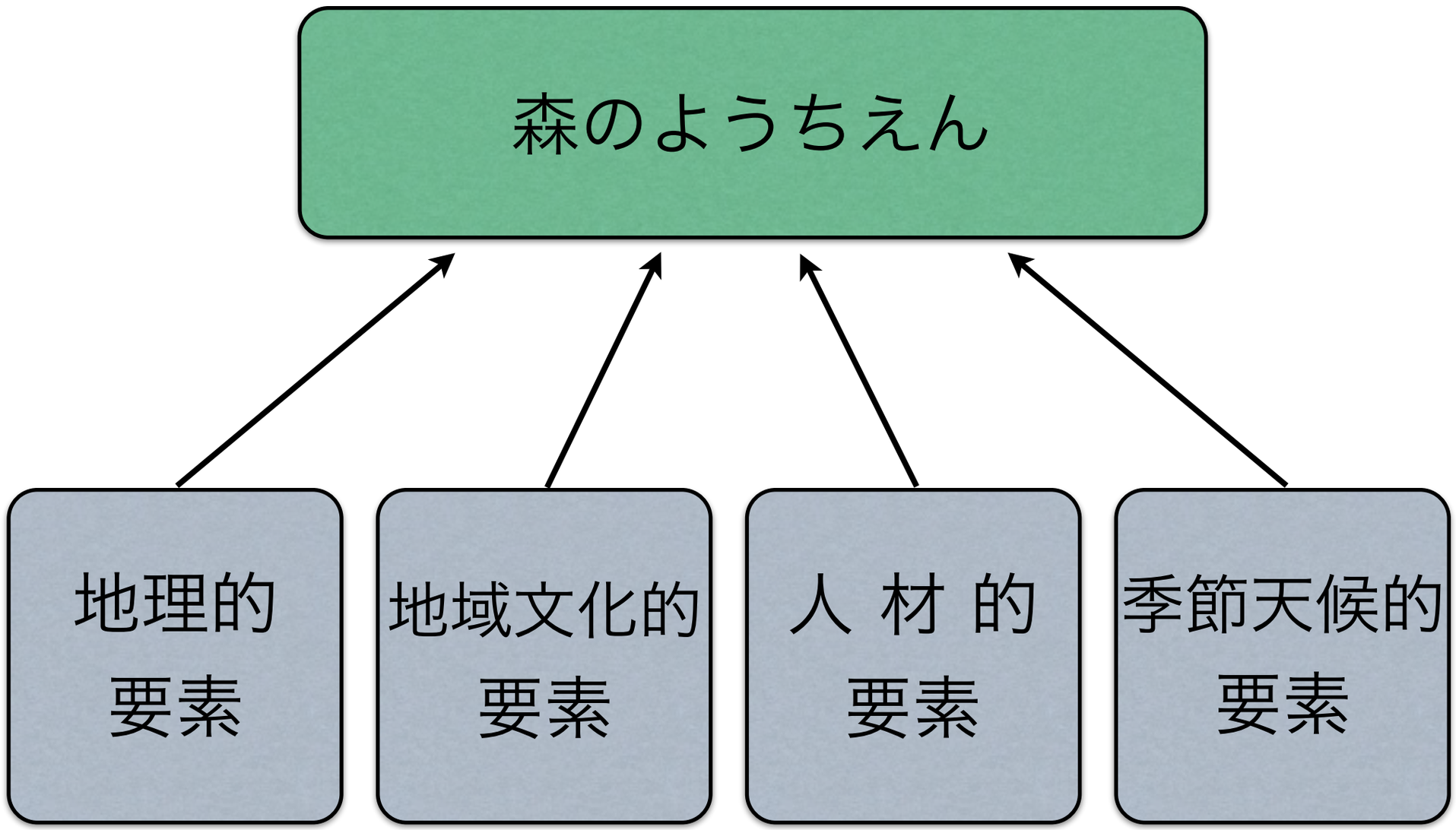
- 海に隣接する地域は砂浜や磯など海浜の様子が異なり、環境に応じた海辺の生物に出合えます。

- 都市部では緑化公園や自然園など人工的に自然環境が整備され、変化に富んだ環境に誰でもが手軽に近づけます。

保育資源という

考え方

保育資源という考え方・視点



地理的要素

具体的に言うと

〇散歩に適した遊歩道がある。

〇水遊びの出来る川がある。

〇ドングリ、松ぼっくりなどが拾える森がある。

〇面白い公園がある。動物園や牧場がある。

〇日常的に過ごせる森がある。

〇田んぼや畑が使える。収穫が体験できる。

〇野外料理が出来る場所がある。

地域文化的要素

具体的に言うと

○地域の伝統的なお祭り、伝統芸能

○伝統行事、地域食、伝統食がある。

○地域的な昔話や伝説、言い伝えがある。

○歴史的遺産や史跡（城跡、古墳、遺跡など）

○地域の産物（農業、漁業、林業、手工芸など）

人 材 的 要 素

具体的に言うと

○昔話や語りの出来る人がいる。

○人形劇を見せてくれる人がいる。

○地域の農業や暮らしぶりを教えてくれる人

○面白いパフォーマンスや楽器の演奏者がいる。

○自然のことに詳しい人がいる。

○地域のお年寄りと交流ができる。

○保護者、保育者の様々な力を活かす。

○地域に協力者、理解者がいる。

季節天候的要素

具体的に言うと

〇晴れの日、雨の日

〇寒い季節、暑い季節

〇降雪、みぞれ、あられ

〇霜が降りる日、氷がはる日、風のある日

〇太陽の日差し、日向、日陰

〇夜を過ごす

〇四季の変化

森のようちえんで

保育者は

どのような考え方をもって

子ども達とどんな関わりを

しているのでしょう

森のようちえんでは
自然の中にいるのがあたり前になるように

・ 自然から私たちは様々なことを学んできました。子どもでも大人でも自然の中にいるだけで様々な刺激を受けます。誰でも自然の中で活動すれば様々な事を感じ、発見や気付きがあります。そのために子ども達を出来るだけ多くの時間自然の中に出します。

森のようちえんでは出来るだけ
年齢差による制限はしません

- 森のようちえんでは子どもたちが様々な体験をしていますが、年齢差による制限はできるだけしないようにします。異年齢の子ども同士の間で様々に交流し、学び合うことができるためです。

- 調理や大工仕事、畑での野菜作りや田植え稲刈り、お泊まり会や野外でのキャンプ、登山、雪遊びなど様々な活動が入る傾向があります。調理で包丁を使ったり、鎌を使っての稲刈りや大工道具の鋸などの刃物もよく使われますがそうした活動でも年齢による制限はほとんどされません。

森のようちえんでは
自然と人との関係をつなげ発展させます

- 子どもたちは自然の中で得られた物をつかって工作や料理などする機会を持ちます。例えば枝や木の実、ツルなどを使った工作、山菜や茸を使った調理などを行います。それらの物は自然の中に存在している物から、有効に利用出来る物として変化し認識されます。このことは自然物に対する見方を大きく変えます。人の手によって自然物を変化させ、自分にとってよい使い道があることに気づくことになります。

森のようちえんにとって
森は創造性や空想を生む世界であること

- 幼児にとって森の中は空想めぐらす世界でもあります。妖精や天狗、お化けや怪物などがいる場所にもなり、森ではそれぞれに様々な営みがあり、動物の家族や昆虫がまるで人間の世界のように暮らしている様に思えたり、妖精や怪物が事件を巻き起こしていると思えたりします。この空想的なメルヘンの世界は幼児期の内面、精神的な成長に欠かすことが出来ません。豊かな創造性を育むセンスある活動を展開したいものです。

森のようちえんの活動の大切なポイントは自然の世界を表現活動につなげる

- 森の中での発見・発想は、子どもたちと共につくるお話しや劇遊びの素材になり、メルヘンの世界を発展させることが出来ます。こうした自然を背景にした表現活動は、幼児期の独創性や豊かな創造性の土台となり子どもたちの感性とうまく合った表現活動となります。森は単なる森ではなく、創造性や空想の世界を生む根源的な存在として保育者は捉えることが大切です。

保育者の関わり方

保育者が子どもと関わる際に大切にしていること

- 保育者は子どもとの共感的な関係を保ちながら、子どもが主体的な立場で動けるよう関わります。
- 子どもが受け身の立場に慣らされることの無い様に配慮し、保育者は関わります。
- 子ども達が考え答えを出せる様に適切な応答関係を築きながら保育者は関わります。

- 子ども達が日常の中で気付き発見したこと等を発表したりする機会をつくっています。
- 子どもの気持ちや内面で何が巻き起こっているのか受けとめ、肯定的な言葉かけを行います。
- 子ども達が安心した気持ちでいられるように穏やかな表情と落ち着いたやさしさを感じる対応を常に行う。

保育者は何をしているのか

- 森のようちえんの保育者は子ども達が主体的に動いているかを見抜くと同時に子ども達が動くためのきっかけを様々に作っています。

- ある時は待ち、ある時は自らが手本となり、また遊び相手であったり、誘いかけや援助を行うこともします。

- 言葉で誘い、行動で示し、活動を提示することも、更にはプログラムとして子どもの成長を促す計画的な保育を行います。

- 子ども達が保育者に安心感を感じ、その保育者のもとで自分らしさを発揮できてることが大切。
- 子ども達の行動や態度から保育者に対する子ども達の内面の状態を感じ取り、より良い関係を築く様にします。
- いつでも自分を受容してくれるが、必要以上の関わりはせずに、その子の可能性を引き出す様に関わる。

- 子どもの考えや発見に対して共感的な関係を持つことは、子どもから見れば自分が肯定されたことになります。

- 共感的な関係を積み上げることで子どもは保育者を信頼します。 信頼する保育者から子ども達は様々なことを抵抗感無く学びます。

おわり

森のようちえん全国ネットワーク連盟
内田　幸一